

まじめでユーモラスな萬葉集

〔第一部〕 萬葉集の概要

- (一) 全二〇巻、四五〇〇余首
- (二) 対象となる期間は四世紀～七五九年
- (三) バラエティに富んだ作者
- (四) 万葉仮名
- (五) 数多くの不明な点

〔第二部〕 萬葉集のユーモア

- (一) 万葉仮名にみるなぞなぞ的センス
- (二) おもしろい言い回しの歌
- (三) ウィットに富んだ歌のやりとり

〔第三部〕 萬葉集に託されたメッセージ

- (一) 初めと終わりの歌、そして
- (二) 萬葉集がつくられた時代背景
- (三) 萬葉集という名の意味

〔参考文献〕

「第一部」 萬葉集の概要

(一) 全二〇巻、四五〇〇余首

・短歌 「五七五七七」(約四二〇〇首)

・長歌 「五七五七七：七」 約二六〇首)

・旋頭歌 「五七七七七」(約六〇首)

・仏足石歌 「五七七七七」(一首・三八八四番)

(二) 対象となる期間は四世紀～七五九年

①	仁徳天皇(四世紀) ～ 舒明天皇(七世紀) 以前 ・雄略天皇
②	舒明天皇(在位六二九～六四一年) ～ 壬申の乱(六七二年) ・天智天皇(中大兄皇子)、額田王
③	壬申の乱～平城京遷都(七二〇年) ・天武天皇、持統天皇、柿本人麻呂
④	平城京遷都～七三〇年前後 ・大伴旅人、山上憶良、大伴坂上郎女、山部赤人
⑤	七三〇年前後～七五九年 ・大伴家持

(三) バラエティに富んだ作者

① 「作者層は、天皇・皇后をはじめとして皇族・貴族・宮廷官人から農民・遊行女婦・乞食者に至るまで実に多様な階層にわたる」

(『万葉集を知る事典』4ページ)

② 二一〇〇首以上が作者未詳歌

③ 東歌(二三〇首)、防人歌(九八首)

(四) 万葉仮名

① あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る

(二〇番 額田王)

茜草指 武良前野逝 標野行 野守者不見哉 君之袖布流

② 万葉集「すべて漢字で書かれている」 ↑ ますらをぶり



古今和歌集「すべてひらがなで書かれている」 ↑ たをやめぶり

③ 春揚 葛山 發雲 立座 妹念

春揚 葛城山に たつ雲の 立ちても坐ても 妹をしそ思ふ

(二四五三番)

(五) 数多くの不明な点

① 原本が見つかっていない (複数の写本)

・ 桂本 (平安中期)

・ 西本願寺本 (鎌倉後期)

・ 廣瀬本 (江戸中期)



② 編集者も成立の時期もはっきりしない

・ 大伴家持私撰説、平城天皇勅撰説他

・ 奈良時代の成立が有力視されるが、平安時代説も…

③ 解釈が確定していない歌がある

高山波 雲根火雄男志等 耳梨與 相諍競伎 神代従 如此尔有

良之 古昔母 然尔有許曾 虚蝉毛 孀乎 相格良思吉

香具山は 畝火ををしと 耳梨と 相あらしひき 神代よりか

くにあるらし 古昔も 然にあれこそ うつせみも 孀をあらそ

ふらしき (一三番 中大兄)

④ 読み方の分からない歌がある

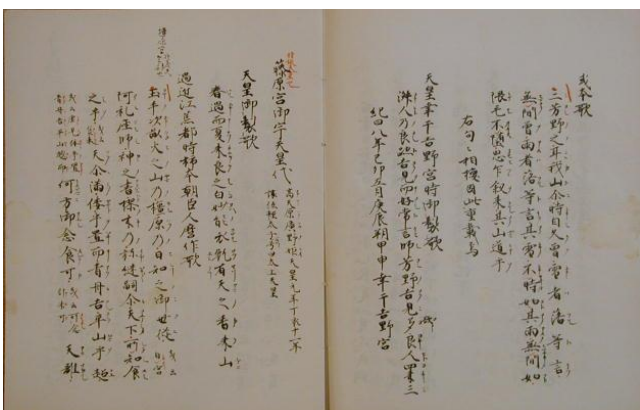
不念乎 思常云者 天地之

神祇毛知寒 邑礼左變

思はぬを 思ふと言はば 天地の

神も知らさむ 邑礼左變

(六五五番)



「第二部」 萬葉集のユーモア

(一) 万葉仮名にみるなぞなぞ的センス

①若草乃 新手枕乎 卷始而 夜哉将間 二八十一不在國

若草の 新手枕を にひたまぐら 巻き初めて 夜をや隔てむ ()
あらなくに (二五四二番)

「若草のような妻とはじめて手枕をかわしそめて、どうして一夜でも間を置くことができようか。() などということは決してないのだから。」

②… 吾衣有 服者奈礼奴 每見 戀者雖益 色二山上復有山者
一可知美 …

… わが着たる 衣はなれぬ 見るごとに 恋はまされど 色
に () ば 人知りぬべみ … (一七八七番)

「… 自分が着ていた、衣類はよれてしまった。それを見るたびに、(妻への)恋は募るが、(顔)色に () ば、人が(自分が妻を恋しがっていることを)知るので、…」

(二) おもしろい言い回しの歌

① 淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見与 良人四来三

() 人の () と () 見て () と言ひし

() 野 () 見よ () 人 () 見つ

(二七番 天武天皇)

「立派な人が よい処としてよく見て 「よし」と言った この吉野を よく見るがいい 立派な人もよく見たことだ。」

② 将来云毛 不来時有乎 不来云乎 将来常者不待 不来云物乎

() () と言ふも () () 時あるを () () と言ふを

() () とは待たじ () () と言ふものを

(五二七番 大伴坂上郎女)

「来よう」と言っても来ない時があるのに 「来られないだろう」と言っているのだから 「もしかしたら来るだろう」と待つなんてことはしません 「来ない」と言っているのですから。」

(三) ウィットに富んだ歌のやりとり

①わが里に 大雪降り 大原の

古りにし里に 落らまくは後

(一〇三番 天武天皇)

わが岡の おかみに言ひて 落らしめし

雪のくだけし そこに散りけむ

(一〇四番 藤原夫人)

②遊士と われは聞けるを 宿貸さず

われを帰せり おその風流士

(一二六番 石川郎女)

遊士に われはありけり 宿貸さず

帰せしわれそ 風流士にある

(一二七番 大伴宿禰田主)

わが聞きし 耳によく似る 葦のうれの

足痛く我が背 自愛給ぶべし

(一二八番 石川郎女)

「第三部」 萬葉集に託されたメッセージ

(一) 初めと終わりの歌、そして…

①籠もよ み籠持ち 掘串もよ み掘串持ち この丘に 菜摘ます
児 家聞かな 名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて
われこそ居れ しきなべて われこそ座せ われこそは 告らめ
家をも名をも
(一番 雄略天皇)

「籠よ 美しい籠を持ち 篋よ 美しい篋を手に持ち この丘で菜
を摘む乙女よ あなたはどここの家の娘なのか？ 名はなんと
言うのか？ この、そらみつ大和の国は、すべて私が治めているのだ
すべて私が支配しているのだ 私こそ明かそう 家柄も名も。」

②大和には 郡山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国
見をすれば 国原は 煙立つ立つ 海原は 鷗立つ立つ うま
し国そ 蜻蛉島 大和の国は
(二番 舒明天皇)

「大和には多くの山があるが とりわけ立派な天の香具山 その頂
に登って国見をすると 土地からはご飯を炊く煙がたくさん立ち
海上には水鳥たちがたくさん飛び交っている 美しい国よ この
蜻蛉島大和の国は。」

③新しき年の始めの初春の今日降る雪のいや重しけ吉よ事こと

(四五―六番 大伴家持)

「元旦と立春が重なった今日降りしきる雪のように 善いことがど
んどん重なりますように。」

※年のうちに 春は来にけり 一とせを 去年とやいはむ 今年と

やいはむ

(古今和歌集 一番 在原元方)

「正月が来ないうちに 立春を迎えてしまった これから大晦日ま
での残りの日は 去年というべきなのか それとも今年と呼ぶべ
きだろうか。」

9

(二) 萬葉集がつくられた時代背景

①《萬葉集》は風流韻事の営みとして生まれたのではなく、東アジ

アの緊張した政治状況の中から産声を上げた…

(『萬葉集の誕生と大陸文化』274ページ)

②この時代は中国から書籍が入ってきてしだいに定着し、外の国と
の関係のなかで自国を意識し、古代国家を造った時代、律令国家
を確立していく時代である。(『萬葉集を読む』4ページ)

③音楽や文学が統治にとって重要な位置を持つことは中国の思想にある。歌は国家にとって必要なものだった。そういうなかで、新たな歌が要求されたのである。 (『万葉集を読む』10ページ)

④中国の詩の影響というものが決定的……。日本はだいたい一時代前の中国文化を模倣しています…。 (『万葉集の世界』11ページ)

(三) 万葉集という名の意味

- ① 「万の言の葉」説
- ② 「万代(世)の集」説
- ③ 「多くの詩華(葉)」説

(『万葉集ハンドブック』7ページ)

『万葉集』を、あらゆる記録類が漢字漢文の影響下に書かれていた奈良時代ないしその延長としての平安初期に位置付けるならば、その書名も漢風によって解釈の方が自然ではなからうか。」

(『完訳 日本の古典2 万葉集 一』361ページ)

「参考文献」

- 青木生子『万葉集の美と心』（講談社学術文庫）一九七九年
- 阿蘇・梅原・中西『万葉集の世界』（筑摩書房）一九八〇年
- 石川九楊『万葉仮名でよむ『万葉集』』（岩波書店）二〇一一年
- 上村悦子『万葉集入門』（講談社学術文庫）一九八一年
- 小川靖彦『万葉集 隠された歴史のメッセージ』（角川選書）二〇一〇年
- 小川靖彦『万葉集と日本人』（角川選書）二〇一四年
- 奥村恆哉『新潮日本古典集成 古今和歌集』（新潮社）一九七八年
- 神野志隆光『万葉集をどう読むか』（東京大学出版会）二〇一三年
- 神野志隆光[監]『別冊太陽 万葉集入門』（平凡社）二〇一一年
- 坂本勝[監]『図説地図とあらすじでわかる！万葉集』（青春新書）二〇〇九年
- 櫻井満[監修]『万葉集を知る事典』（東京堂出版）二〇〇〇年
- 多田一臣[編]『万葉集ハンドブック』（三省堂）一九九九年
- 中西進[監]『図解雑学 楽しくわかる万葉集』（ナツメ社）二〇一一年
- 中西進『萬葉集 全訳注原文付』（講談社）一九八四年
- 古橋信孝[編]『万葉集を読む』（吉川弘文館）二〇〇八年
- 松尾光[編]『古代史がわかる『万葉集』の読み方』（新人物文庫）二〇一一年
- 間宮厚司『万葉異説』（森話社）二〇一一年
- 森淳司[編]『訳文 万葉集』（笠間書院）二〇〇七年
- 山口博『万葉集の誕生と大陸文化』（角川選書）一九九六年
- 『完訳 日本の古典2 萬葉集 一』（小学館）一九八二年
- 『日本名筆選 桂本万葉集 伝紀貫之筆』（二玄社）一九九四年